

ジェー・ジェー・ガデーラ・テー・テー・ガドー

繰り返し

何が起ころうとも、それが起こるに任せよう。

生命が全身を駆け巡り続けるようにさせよう、

さもなくば、肉体が消滅し落ちていくに任せよう。

第1節

けれども、決して私はあなたの足元を離れません、

おお、パンドリーナーター、パンドルプールの神よ。

第2節

困難に苦しみ悩まされている時でさえも、

不幸に付きまとわれている時でさえも、

何度も何度も、私は神の名前を繰り返す。

ラーマクリシュナ・ハリ。

第3節

ナムデーヴはケーシャヴァに、クリシュナ神に言う。

「何が起ころうと、それはこの肉体に起こるのです。

それは私に起こるのではありません」

ウダヤン・バートゥによる紹介

私が抱き、そして私の記憶に永遠に刻み込まれるであろう思い出の一つは、グル・チョークー—グルデーヴ・シッダ・ピートゥの中央に位置し、その中心である中庭——の全体に響き渡るアバンガやバジャンの音を聞いているというものです。

少年時代に、私は母と妹と共に、よくグルデーヴ・シッダ・ピートゥを訪れたものでした。実に多くの場合、アーシュラムには朝に到着し、グルマーイが中庭でダルシヤンを行っていた様子を感じています。彼女の席は、バーバ・ムクターナーンダのサマーディ・シュラインの壁の一つのすぐ外側でした。

インドの習慣では、あなたの才能や能力が何であれ、グルから祝福と教えを受け取ることに感謝してグルにそれをささげます。ですから、音楽の才能がある者は、ダルシヤンの間に歌ったり楽器を演奏することをささげました。グル・チョークの一角には、特別に彼らが音楽をささげる区域がありました。それは、白いジャムンの木、マンゴーの木、ラタラニという夜咲きのジャスミンのつる草の中に立っている、バガバーン・ニッテヤーナンダのムールティの近くでした。

ダルシヤンの間にはよく、そのようなミュージシャンたちが詩聖たちの歌に音楽的な伴奏を添えて歌いました。私がアーシュラムの門の中に足を踏み入れるや否や、空気を伝わってくる甘いメロディーの流れが聞こえてきました。私は、心を和らげる甘美な音の粒子に包まれました。私は多くの喜びを感じました。ただアーシュラムに一步踏み入れただけで、私の足取りは弾みました。そして、事実、その音を聞くと私は、グルマーイがダルシヤンを行っているグル・チョークへと跳んで行きました。私の心は陶醉に満ちあふれました。

私は6歳までにはタブラを習い始め、そしてシッダ・ヨーガのナーマサンキールタナやスワーデーヤを聞いて育ったことから、私は自然に基本的なシッダ・ヨーガの音楽の多くのレパートリーを吸収していました。しかし、グルデーヴ・シッダ・ピートゥにおける9歳、10歳、12歳、15歳の時の体験は、驚くほど私の成長を形作るものでした。私はアーシュラムで音楽のセーヴァをささげ始め、シッダ・ヨーガの祝祭日によく行われたチャンティング・サプタでタブラを演奏しました。午後と夜遅くの時間のシフトは、若いミュージシャンたちにとっては練習の良い機会でした——あまり人がいなかったからです！ 私たちは思い切り演奏でき、ハーモニウムで音符を間違えたり、ドラムで疲れて失速したりしても気にする必要はありませんでした。正直に言って、やるべきこと、やってはいけないことを言う大人は誰もいなかったもので、私たちは思う存分楽しんでいただけです。

2000年と2001年に、グルマールがグルデーヴ・シッダ・ピートゥを訪れた時、私は25歳でした。アーシュラムにいた私たちの多くで、グルマールが到着した時に「歓迎」の歌を披露することになりました。私はこのパフォーマンスの指揮者として参加しました——そして指揮をしながら発見したことは、私にはその自然な適性があったということでした！

2000年にはまた、グルデーヴ・シッダ・ピートゥへの教えの旅の直前に、グルマールはシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムで、最初のプレモツァヴァ音楽リトリートを行いました。リトリートは、シッダ・ヨーガの音楽の原則を学び、実践することで、シッダ・ヨーガのミュージシャンたちがシッダ・ヨーガの音楽を管理する者になれるよう心構えをさせるものでした。このリトリートの責任者たちはグルデーヴ・シッダ・ピートゥにも行って教えの旅を手助けし、そして私が歓迎の歌を指揮しているのを見た時、次のプレモツァヴァ音楽リトリートに参加して指揮の専門家からトレーニングを受けるよう、私を誘いました。こうして、私もまた、シッダ・ヨーガの音楽指揮者になることができたのです。

ですから、シッダ・ヨーガのミュージシャンの一人として、私が大いなる喜びで聴き、演奏し、指揮してきたアバンガの一つ、「ジェー・ジェー・ガデーラ・テー・テー・ガドー」について皆さんに語れることは、私にとって光栄なことです。

詩聖ナムデーヴ・マハーラージによるこのアバンガの言葉を聴き、それについて熟考する時、私がすぐに思うのは、これは放棄の歌——喜びに満ちた放棄の歌——であるということです。私はマハーラーシュトラの人間として、これはグディー・パドゥワー、すなわち私たちの新年にとって理想的な歌だと思います。グディー・パドゥワーは、前途を展望し、これからの月日がもたらすであろうあらゆることの観点から私たちの意図を新たにし、専心し直す時です。ナムデーヴ・マハーラージは、起こるべきことは起こる、と教えます——そして、もし私たちが心に、大いなる自己の強さと確信につながり続けるなら、私たちは安定を保ち、そして、そう、どのようなことに直面しても、喜びあふれる状態でさえいられると教えます。

すべてのアバンガと同じく、ナムデーヴ・マハーラージは土地の言葉でこれを書いています。彼はマハーラーシュトラ州ナルシの村で生まれたので、彼が書いた言語はマラーティー語です。「ジェー・ジェー・ガデーラ・テー・テー・ガドー」はたった三つの節で成り立ち、そして平易なマラーティー語で書かれています。けれど、聞いてください。これら三つの節の中に、ナムデーヴ・マハーラージは探究者が探しているすべてのことを与えているのです。彼は、人生において何が真に重要か、そして、どこから真の滋養を得るかを、あなたが理解するように助けます。ナムデーヴは、この滋養は神を堅く信じること、神への揺らぐことのない信頼、そして神の名をチャンティングすることによって見つかるかと教えています。

2000年の夏、グルマーイの要請によって、デニース・トーマスがインドの偉大な詩聖たちの生涯についての「ゴールデンテール(黄金の物語)」を監督しました。親や保護者と一緒にシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムを訪れていた子どもたちが、それらの演劇の俳優であり、語り手であり、歌い手であり、踊り手でした。それぞれの「ゴールデンテール」の最後には、グルマ

ーイがそれらの子どもたちの多くで構成されたミュージックアンサンブルと一緒に、バジャンやアバンガ、カウワリなどを歌いました。バジャン、アバンガ、カウワリは、多くの場合はちょうど舞台上で演じられたばかりの詩聖のものでした。

「ジェー・ジェー・ガデーラ・テー・テー・ガドー」は、ナムデーヴ・マハーラージの生涯についての「ゴールデンテール」の後に歌われました。グルマーイがこの楽曲の編曲をし、それはこのアバンガの伝統的なメロディーに基づいたものです。この歌の録音は、グルマーイが若者たちと一緒に、それぞれの「ゴールデンテール」の後に歌ったその他の歌の数々と一緒に「Sounds of the Heart (心の音)」の CD として、シッダ・ヨーガのブックストアで購入できます。

2000年と2001年の、グルデーヴ・シッダ・ピートゥでのグルマーイの教えの旅の最後の3晩に、「ゴールデンテール」からのバジャンとアバンガを皆で歌うように、彼女が要請したことを覚えています。私はキールタンの指揮をするというとても素晴らしい幸運なセーヴァーを持っていました。グルデーヴ・シッダ・ピートゥを訪れたことのある人であれば誰でも、グル・チョークの夜空の魔法を知っています。グルマーイの教えの旅の最後のそれらの晩は、ことさら魔法のように感じられました。

それはグルデーヴ・シッダ・ピートゥで、一人または少人数のミュージシャンではなく、ホールにいる全員でバジャンとアバンガを歌う初めての時でした。ミュージックアンサンブルには約25人いました。インド出身の者と、グルマーイの教えの旅を支えるセーヴァーをささげるためにインドへ旅をしてきたミュージシャンたちです。その上、そこに参加していたほとんどの人たちはバジャンとアバンガを知っていたので、彼らも一緒に歌いました。それはまるで誰もが、インドの献身的な音楽の大きな合唱団の一部になったかのようなようでした。

それらの3日間、あらゆることとすべての人々は、夕方に起こることに集中しました。人々はサツァングを待ち切れませんでした。彼らが日中に話していたのは、そのことばかりでした。セー

ヴァーをささげる時に、バジャンとアバンガを歌いました。これから起きることを予測するだけで、満面の笑顔になりました。それはラサリーラーのようでした——すべてのゴープーがクリシュナ神の踊りを待っていたのです。

サツァングの時間が近づくと、人々はグル・チョークへ行くために早めに夕食を終えました。あっという間に、中庭は満員でした。空気の中にみんなの期待を感じることができます。彼らはグルマーイと一緒に歌うことを熱望していました。

そしてバジャンが始まると、アーシュラムにあるすべてのレンガ、すべてのタイル、すべての壁、すべてのほこりの粒子、すべての水の分子に、グルマーイが恩恵と祝福を刻み込んでいると、私は感じました。すべての物はグルマーイの恩恵と彼女のシャクティで充満していると感じました。その体験は電撃的であると同時に完全に平安でした。私たちは一気に高く舞い上がると同時に、しっかりと地に足が付いていました。その場の雰囲気は恍惚(こうこつ)とした音で満たされています。私たちの敬愛するグルマーイの面前で、詩聖ナームデーヴ・マハーラージの体験が明らかになりました。

今日、あなたがグディー・パドゥワーをさらに学び、グディー・パドゥワーを祝うことを望む時、私は——マハーラーシュトラ州の者であり、シッダ・ヨーガのミュージシャンとして——このアバンガを聞き、ナームデーヴ・マハーラージの言葉に内在するメッセージの美しさと奥深さを味わうことをお勧めします。



© 2020 SYDA Foundation®. 著作権所有。

このアバンガは『Sounds of the Heart(心の音)』の CD として
シッダ・ヨーガ・ブックストアで購入できます。